

和歌・歌人物語

窪田敏夫



古典文学全集〈24〉

和歌・歌人物語

窪田敏夫



窪田敏夫

和歌・歌人物語

ポプラ社 昭和47 (1972)

258 P 23cm (古典文学全集 24)

【分類】 918

著者略歴

1899年、東京に生まれ、東京大学国文学科を卒業後、浪速高校・水戸高校・第四高等学校（何れも旧制）、金沢大学の各教授を経て、現在、実践女子大学教授。和歌文学会常任委員、全国大学国語国文学会理事。和歌史に関する論文数十あり。

古典文学全集・24

（著者との話し合いにより校印廃止）

和歌・歌人物語

480円

著者・窪田敏夫

発行・昭和47年8月30日◎

発行者 久保田忠夫

発行所・株式会社 ポプラ社

東京都新宿区須賀町5 振替東京149271番

活版印刷・新興印刷製本株式会社

オフセット印刷・有限会社 トライ印刷所

口絵原色印刷・株式会社 双美堂

製本所・石井製本工場

クロス・東洋クロス株式会社

本文紙・北越製紙特漉上質

は し が き

和歌はみなさんも知っているように、仮名で書いてもわずか三十一字というごくみじかい形の詩です。五七五七七という、五つの音のグループでできているということを知っている人もいるでしょう。日本の文学のなかで、いちばん古い昔からあって、今日でもかぞえきれないほど多くの人びとにつくられ、またしたしまれている、ながい歴史とひろい愛好者の層を持った文学です。ひろく世界の文学をながめてみても例のない、じつにめずらしい存在の文学です。

和歌という名前は、大和歌というところからいわれたもので、これは唐歌と呼ばれた中国から伝わった漢文の詩に対するものとして、へ日本の国の歌」という意味でいわれはじめたのです。今の京都に都が定められた八世紀の終わりごろには、もうひろく人びとにそう呼ばれていたようです。

みなさんも『万葉集』という歌集の名を聞いたことがあるでしょう。この全集の第二巻にもはいってありますから、ぜひお読みになってください。『万葉集』は、日本の文化が開けはじめた大和時代から、奈良時代の中ごろまでの歌を集めたものです。そのころさかんになった歌も、『万葉集』ができあがる奈良時代の終わりごろになると、いちどはおとろえたのでした。しかし、桓武天皇が都を平安京(京都)にうつしてからしばらくしますと、世の中がよく治まるようになり、それにつれて和歌を



つくって楽しむことも、前以上にさかんになってきました。そしてさかんになるにつれて、『万葉集』のころのものは、いろいろな点ですこしずつちがいが出てきました。こうしたなかから生まれたのが『古今和歌集』という歌集です。それからのは、ときどき人びとに『万葉集』が思いかえされてはいますが、だいたいは、この平安時代のはじめにできた『古今和歌集』の歌の形をもととして、明治時代になるまで、大勢の歌詠みがりつばななくさんの歌を残してきたのです。

この本では、たくさんの方の歌人のなかから、代表的な五十人ほどをえらびだして、歌とその生涯について説明したつもりです。きっと、みなさんも名前ぐらいは知っている人もいるでしょう。

ついでに、この本を読まれるときの注意を申しますと、一気にはじめから読みとおそうと思わないでください。順に一日にひとりずつ読んでもけっこうですし、どこでも好きなところをあけて読み、そこに興味があつたら、前後どこでも読むという方法でもよいのです。そうしないと、あるいは退屈するかもしれません。全部読みとおせば、日本の和歌の歴史や和歌というものが理解できるように書いたつもりです。

窪田敏夫

能 のう	紫式部 むらさきしきぶ と清少納言 せいしょうなごん	因 いん	曾 そ 禰 ね 好 こ 忠 ただ	源 みなもと 順 したごう	紀友則 きとものり と壬生忠岑 みぶのただみね	凡 おうしこう 河内躬恒 ちのちつね	紀 きの 貫 つら 之 ゆき	小 お 野 の 小 こ 町 まち	在 あり 原 わらの 業 なり 平 ひら	小 お 野 の 篁 たかむら	安 あ 倍 べ 仲 なか 磨 まろ
室	六	室	三	四	四	三	三	二	二	三	八



村 ^{むら}	加 ^か	本 ^{もと}	田 ^た	賀 ^か	下 ^{しも}	戸 ^と	深 ^{ふか}	木 ^{きの}	細 ^{ほそ}	正 ^{しょう}	頓 ^{とん}	京 ^{きやう}	源 ^{みなもと}	後 ^ご
田 ^た	藤 ^{とう}	居 ^お	安 ^{やす}	茂 ^も	河 ^{こう}	田 ^た	草 ^{くさ}	下 ^{した}	川 ^{かわ}			極 ^{ごく}		鳥 ^と
春 ^{はる}	千 ^ち	宣 ^{のり}	宗 ^{むね}	真 ^ま	辺 ^へ	茂 ^も	元 ^{もと}	長 ^{ちやう}	幽 ^{ゆう}			為 ^{ため}	実 ^{さね}	羽 ^ば
海 ^み	蔭 ^{かげ}	長 ^{なが}	武 ^{たけ}	淵 ^{ぶち}	流 ^{りゅう}	睡 ^{すい}	政 ^{まさ}	子 ^し	斎 ^{さい}	徹 ^{てつ}	阿 ^あ	兼 ^{かね}	朝 ^{とも}	院 ^{いん}
三	三八	三四	三〇	二六	二二	一九	一五	一九	一七	一八	一九	一五	一六	一六



和歌・歌人物語

窪田敏夫



安倍仲麿

桓武天皇が延暦十三年（七九四年）に都を奈良から今の京都にうつされて、ここを平安京と呼ばれました。それはここで人びとの心をあたらしくして、よい政治をとろうとしたからです。それがだいにみのつて、この平安時代に、日本の文学はいろいろな文学をりっぱにそだてたのです。そのころ、われわれが今日つかっている仮名文字や、『源氏物語』とか、『枕草子』とかの名高い本ができたのですが、この時代に、和歌のほうでまず第一に名のりをあげたのが、『古今和歌集』です。

この和歌集は略して『古今集』ともいい、いちばんはじめの勅撰集です。勅撰というのは、天皇や上皇、または法皇などの命によって歌を集め、編集したもので、この後、『新続古今集』（二四三八年）まで、二十一の勅撰和歌集がありました。この『古今集』は、平安京に都がうつされてからの歌が集められたもので、醍醐天皇の延喜五年（九〇五年）にできたことがわかっています。

この『古今集』が世に出るころまでには、和歌はいろいろの形をもっていたのですが、このころになると、だいたい和歌は〈短歌〉という、五七五七七の音のかさなりをもった三十一音の形となりました。その後、今日まで和歌といえば、だいたい短歌をさすことのようになっているのです。これからお話しする歌詠みの人たちは、みなこの短歌をおもにつくった人たちなのです。

『万葉集』以後の時代の歌を知るには、この『古今集』よりよいものはないのですが、この歌集には名前のわかった歌人が二百二十人ほどあります。そのほかへよみ人しらずとされる歌もたくさんあります。名の知れた人のなかにも、『古今集』が出たころにはもう死んでいた人もあります。こまかに見てゆきますと、まだいろいろなことがわかりますが、ここではだいたい、時代にしたがって、歌人たちをならべて、その時どきの和歌のことなど織りまぜて話をすすめることにしましょう。

さて、前にも書きましたが、この『古今集』は、醍醐天皇のいいつけで延喜五年四月十八日に、紀友則・紀貫之・凡河内躬恒・壬生忠岑たちによって勅撰されたことが序文で知られるのです。そして、このえらんだ人たちより、もっと昔にいた人たちの歌も、この集のなかに見いだせるのです。それで、『古今集』のことは貫之のところでもたお話しすることとして、だいたい時代にしたがって、まずこの『古今集』に見える古い時代の人から、順に書いていきたいと思ひます。

さて『古今集』にはつきり名を書きつけてある歌で、いちばん古く、また名高いのはこの人の歌です。

天の原ふりさけみれば春日なる三笠の山に出でし月かも

（大空を遠くながめやりますと、美しく月がかがやいているが、あれは私の古里のあの奈良の三笠の山に出ている月でありますよ。）

といったものです。この安倍仲麿という人は、『古今集』ができたときより、よほど昔の人で、元正天

皇の靈龜二年（七十六年）、十六歳のときに中国へのお使いとしてつかわされた遣唐使といっしよに、留学生として唐に行き、そのまま唐にとどまって七十歳で亡くなった人です。もちろん、いちどは日本に帰ろうとしたこともあったのですが、船が難破したため、ふたたび唐にもどってしまったのです。学問がよくできた人なので、唐の役人になり、たいせつにされたのでした。

この歌は、『古今集』の巻九のいちばんはじめにあり、そのあとに、この歌ができたわけが書いてあります。それによりますと、天平勝宝三年（七五二年）藤原清河という人が、遣唐使として唐に渡り、日本へ帰るときに、仲暦もいっしよに帰ろうとしました。明州というところの海辺で、唐の人たちがお別れの詩をつくったとき、仲暦も日本の国をしのんでよんだものだを書いてあります。

このときの船は難破して、仲暦はまた唐にもどったのですが、唐に渡って三十五年のちに、自分の生まれた国にもどれる喜びや、またながく暮らした唐土とわかれる思いが、仲暦の胸のなかでいろいろにみだれたであります。

そのような思いのなかで、少年の日に見た美しい奈良の都の郊外にあるあの三笠山に、美しく照りさえた月の姿を思い、古里や、そこに住む肉親の人たちを思つてこのようにつくつたものと思えます。歌はみじかい形の文学ですから、歌のなかで、ただ三笠の山とだけいっていますが、この三笠の山の一語には古里の山や川やの自然も、そこに住む人たちのようすも、みなこめていっているのだと考えてよいのです。

11 安倍仲磨



小野篁

もうひとり『古今集』に見える古い時代の人は、小野篁です。この人は延暦二十一年（八〇二年）に生まれて、五十歳ぐらいで亡くなったらしいのです。

この時代の人たちは相当らしい人でも、多くの人が生まれたときや死んだときをはっきり知ることができません。この人の死んだときも、やはりはっきりしないのです。篁という人は歌人でもあり漢学者でもあって、当時の名高い人でした。そのためにいろいろの話が伝えられているのですが、どこまでその話がほんとうなのかわかりません。

わたの原八十島かけてこぎ出でぬと人にはつげよあまの釣舟

（海の上をはるかに、たくさん島のあいだを通って私の舟は漕ぎだしていったと、私を思ってくれてる人につけてくださいよ、この海に釣りをしている釣舟の人よ。）

これは篁が罪をえて隠岐（島根県）の国へ流されるときに、都にいる人に贈った歌なのです。

篁は承和元年（八三四年）に遣唐使の副使という役に任ぜられ、承和三年（八三六年）に出発したのですが、とちゅう嵐にあつてひき返しました。二年後にまた出かけようとしたとき、大使の藤原常嗣

は、まへの嵐あらしのときに自分の乗った船がこわれたので、こわれなかった篁たかむらの船を取りあげて、正使せいしの船としました。篁はこれをおこつて、病氣だといつて天皇の命めいにしたがわなかったので、隠岐おきに流されたのです。

まへの歌はそのときの歌なのです。瀬戸内海せとないかいの島々のあいだを漕こいで、遠く隠岐おきの島まで行くそのさびしさを、点々てんてんと釣つりをするあまの漕こいでいる釣舟つりふねに呼びかけて、せめてもの思いやりとしたのでしょう。篁たかむらは隠岐に三年ほどいて、承和七年じやうわ（八四〇年）に召めし返されています。

花の色は雪にまじりて見えずともかをだに（おと）にほへ人のしるべく

これは、梅うめの花に雪の降ったのをよんだものです。

しかりとてそむかれなく（こ）に事ことしあればまづ（づ）なげかれぬあなう世の中

これは題だいがありません。意味は、そうだからといって、この世をすてることもできない。それでなにかことがあれば、ああこの世はつらいものと嘆なげかれるというのです。

在 原 業 平

阿倍仲麿や小野篁は、『古今集』のなかではだいぶ昔の人でした。『古今集』の大立て者の紀貫之などの、まだ生まれるはるか前に、この人たちは死んでいました。ですから、この貫之たちと、この仲麿や篁などのあいだには、まだいくたりかの歌人がいたのです。その人たちのころから、『万葉集』の歌とはまたひとつちがった『古今集』の歌らしい歌がつくられたといってもよいのです。その人たちでもっとも名高い六人の人を、へ六歌仙という名で呼んでいます。

歌仙というのは、歌の名人というほどの意味なのです。ここにその六人の名をあげておきますと、僧正遍昭・在原業平・文屋康秀・喜撰法師・小野小町・大伴黒主の六人ですが、このうちで名高いのは在原業平と、小野小町です。そこで、ここではこのふたりについてお話をすすめましょう。

さてその在原業平ですが、この人は、天長二年（八二五年）に生まれ、元慶四年（八八〇年）に五十六歳で亡くなっています。この人は平城天皇の第三皇子阿保親王の五番めの子で、その母は桓武天皇の皇女です。ですから皇族だったのですが、在原の姓をいただいて、臣下になりました。

りっぱな家柄の人であるだけに、その伝記も当時の人としてはいろいろと書いたものに残されています。その時代から歌がじょうずであったことは評判でしたが、いっぽう、いろいろなことに自由に